

日本と中国

—その過去・現在・未来—

井上 久 士



井上 久士（いのうえ ひさし）駿河台大学法学部教授
一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了。現在駿河台大学法学部教授。専門は中国近現代史、日中関係史。主な著書に、『中国国民政府史の研究』（共著・汲古書院）、『戦後中国国民政府史の研究』（共著・中央大学出版部）、『重慶国民政府史の研究』（共著・東京大学出版会）、『抗日戦争と中国民衆』（共著・法律文化社）、『中国河北省における三光作戦』（共著・大月書店）などがある。

1. はじめに
2. 近代日本の脱亜論とアジア主義
3. 中国の20世紀
4. 新しいアジア主義へ
5. おわりに

1. はじめに

ただいまご紹介いただきました井上久士です。私は近現代中国の政治史を専門としておりますが、20世紀の中国を考察の対象としますと、どうしても日本との関係がたいへん重要なファクターとして入ってまいります。したがって日中関係の歴史を考えざるをえません。そこで今日は近代の日本と中国の関係について、日本がどのように考えてきたのか、これからどう考えたらよいかを中心に少々お話しして、皆さま方のご批判を仰ぎたいと思います。

21世紀に入り経済的側面ではますます両国の相互依存関係が強まっている一方で、両国関係は必ずしも順調ではありません。これは政府間だけのことではなく、国民の意識や感情の面でも同様なことが言えるでしょう。小泉内閣の時代、首相の靖国神社参拝に中国政府が強く反発する、中国国民の間でも一部で反日デモがおこる、それを日本のメディアが過剰に報道する、日本では小泉人気を背景に中国への嫌悪感が増幅される、そのような図式が見られたように思います。中国の反日は日本側の行動によって引き起こされたとも言えるので、鶏とたまごはどちらが先に生まれたかを簡単に決めつけることはできません。しかし両方とも相手に非があると思っているわけです。

その後安倍内閣、福田内閣となり、日中の政府間関係はいくらか改善されてきましたが、両国の国民感情ということになりますとなかなか簡単によくなりません。しかし反日に反中で応じ、反中に反日で対抗したのでは、東アジアの未来も全然見えてこないわけで、両国にとっても世界にとっても何ら益するところのない不毛の議論に迷い込んでしまいます。

私たちはやはり未来志向の日中関係や日本とアジアの関係を築いていく必要があります。最近東アジア共同体とかアジア共通通貨などの用語がしばしばみられるようになりました。明日にでもそれらが実現するとは思われませんが、中長期的将来もっと現実味をおびてくる可能性があります。そうしたことを考えるには何が必要でしょうか。私は歴史家のためか、どうしても未来を考えるためにも過去の日本人が中国をどう考えてきたのかを想起してしまいます。そのうえで現在や未来を考えたいと思いますので、少しさかのぼって近代日本の中国認識、アジア認識をみてみたいと思います。

2. 近代日本の脱亜論とアジア主義

古代においては中国は日本にとってあらゆる面で先進国でありましたが、明治以降になりますとその関係は大きく変化しました。日本は文明開化が合い言葉になりました。最近の中国で「文明を大切にしよう」と

というようなことを言いますが、これは社会的マナー程度の意味です。明治の日本の「文明」概念とはもっと深刻で、社会の発展段階を示すひとつのキーワードであったと思います。

福沢諭吉は、1875年の『文明論之概略』のなかで社会を文明、半開、野蛮の三段階に分けて、欧米は文明、トルコ・日本・中国などが半開、アフリカは野蛮と言っています。それは世界の諸地域の発展段階を示していると同時に、非文明である半開、野蛮は文明をめざさなければならないということでもあります。文明は欧米でありますから、わが日本としても文明をめざすことは、すなわち欧米化するということになります。欧米化すればするほど日本は進歩したことになるわけです。

福沢諭吉は個人の自立ということを文明の重要な要素と考えていましたが、国家としてとらえると、その文明諸国が非文明の国家や地域を、植民地として支配したり支配しようとしている現状がある。いわゆる帝国主義の問題です。彼は中国や朝鮮の「文明化」能力について懐疑的、否定的にみていました。

その十年後に書かれた福沢諭吉の「脱亜論」になりますと、その点をもっとはっきりと述べています。日本の国民精神は西洋の文明に移ったが、中国と朝鮮は「改進」というものを知らない、このままいけば結局世界文明諸国に分割されて亡国となるであろうというわけです。

では日本は中国・朝鮮にどう対処したらよいのか。彼はこう述べています。「わが国は隣国の開明を待つて共にアジアを興すの猶予あるべからず、むしろその伍を脱して西洋の文明国と進退を共にし、その支那朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず、正に西洋人がこれに接するの風に従って処分すべきのみ。悪友を親しむ者は共に悪名を免がるべからず。我れは心においてアジア東方の悪友を謝絶するものなり」。ここでは中国や朝鮮は日本の「悪友」とされています。いくら幼なじみであっても、悪友とつきあっていると自分まで悪くなってしまう、日本はこういう悪友ときっぱり手を切って、西洋文明国の側に立たなければいけないというのです。その際中国や朝鮮に対しては、「正に西洋人がこれに接するの風に従って処分すべきのみ」、つまり植民地

にしたり、植民地にしないまでも不平等条約その他で權益を確保し優位な立場に立つのは当然であり、むしろそうすべきだということになります。ですから「脱亜論」の「脱亜」というのは、日本が非文明的アジアから脱却するというだけのことではありません。日本も非文明的アジアを西洋文明的に支配すべきだという主張を含んでいるのです。そこからは中国や朝鮮との協力や相手への共感は生まれてきません。

福沢諭吉にかぎらず近代日本の多くの指導者にとって、文明はあこがれであると同時に脅威でもありました。その脅威とは、文明によって日本が支配されてしまうのではないかということです。そこで日本は文明化すべきだし、文明化できないか文明化する気もない中国や朝鮮は支配されて当然だという論理が生まれてきたのだと思います。福沢は別の文章で「アジア東方の保護は我責任なり」とまで言っていました。

こうした文明による脅威という意識を共有しながら、西洋的文明化に対してアジア諸国諸民族が協力連帯してしていこうという考え方も一方でありました。アジア主義というのはなかなか定義が難しく、人によって使い方も一様ではありませんが、ここではそうした考え方をアジア主義と呼んでおきます。

東京美術学校の初代校長をつとめた岡倉天心は、アジアの文化や芸術を尊重する立場からアジア主義をとなえた人物です。彼は有名な「アジアはひとつである」ということばを残しました。彼は文明開化の名のもと優れた日本やアジアの文化がまるで非文明的なもののように捨て去られようとしていることに猛烈に反発しました。

その岡倉天心は、日露戦争の直後英文で『茶の本』を書きました。そこで彼はこう言っています。「西洋人は、日本が平和で、しとやかな芸術にふけていた間は野蛮国とみなしていたのだが、満州の戦場で大がかりな殺戮をはじめてからは文明国とよんでいる。……もしもわが国が文明国となるために、血なまぐさい戦争の栄光に基づかなければならぬのなら、われわれは喜んで野蛮人のままでいよう。そうして、われわれの芸術と理想に対して、しかるべき尊敬の払われる時まで喜んで待っていよう」。「満州の戦場」とはもちろん日露戦争のことをさしてい

ます。これは「文明国」に対する彼の最大の異議申し立てです。野蛮とか非文明とはいったい何なのか、文明の名で行われていることは実は野蛮ではないのか、こうした近代世界へのきわめてラディカルな問題提起を彼は行ったのだと思います。

そこで岡倉天心は非文明とされがちだった日本やアジアの過去の文化や芸術を通じてアジアの自己主張を試みました。「今日のアジアの課題は、アジアの様式を守り、これを回復することにある。しかし、これをなし遂げるためには、アジア自身がまずこうした様式の意味を認め、その意識を発展させてゆかねばならない」（『東洋の理想』）という思いが、彼のアジア主義の根底にありました。西洋の文明そして日本の文明開化とされるものへの懐疑は、彼をアジアの芸術への再評価に向かわせたのです。つまり彼の文明観とアジア観は不可分の関係にあったことがわかります。

岡倉天心は中国やインドの思想や芸術に深い敬意をはらうと同時に、西洋のアジア支配に対してアジアが共同で立ち上がるべきだと考えていました。20世紀の初頭彼はアジアの自覚を訴え、「アジアは常にその大きな身体を動かすのに遅鈍だった。しかし明日は、この眠れる巨象が目ざめて、彼らを戦慄すべき敗走の運命におとし入れるであろう。そしてもし、八億三千万の民衆が真に激怒するならば、大地はその一步一步にうち揺らぐであろう」（『東洋のめざめ』1902年）と述べました。

岡倉天心はおもに文化や芸術関係の仕事にかかわったので、あまり直接に政治的活動はしませんでした。もっと積極的に政治とか中国の革命にかかわったアジア主義者に宮崎滔天という人がいます。彼も近代の文明を「野蛮的文明」と言っています。近代世界は「弱肉強食の修羅場」を実現したものにはすぎないと言うのです。野蛮的文明というからには文明的文明というものがあるのでしょうか。それを彼ははっきりと述べていませんが、おそらく宮崎滔天なら「四民平等無我自由、万国共和の極楽」を実現するということになるのでしょうか。

「野蛮的文明」によってアジアが脅威にさらされている時、宮崎滔天が目にしたのが清朝末期の中国でした。福沢諭吉が、「脱亜論」で中国

と朝鮮はこのままいけば「今より数年を出でずして亡国となり、その国土は世界文明諸国の分割に帰すべきこと一点の疑いあることなし」と言ったのにたいし、宮崎はアジアが衰亡するかどうかは未定であるとなりました。そしてそれは中国の動向にかかっていると次のように述べています。「もし支那にして衰亡に了んか、東方諸国遂に救うべからざるに至らん。もし支那にして勃興せんか、東方諸国以て救うべし。管にこれを救うを得んのみならず、進んで世界の運命を左右するに至るもまた難からず。しかり転禍為福、ただこれこの一機にあり」（「孫逸仙」）。中国が衰亡すればアジア全体も救いがたくなってしまいが、反対に中国が新たに発展をはじめれば展望がでてくる、それだけでなく世界の運命を左右することになるというのです。

宮崎滔天という人は、たいへんな熱血漢の理想主義者であったので、その言論は現実離れしているところも多いのですが、彼は孫文ら中国革命家の清朝打倒の革命運動を欲得抜きで支援しました。福沢諭吉が「わが国は隣国の開明を待って共にアジアを興すの猶予あるべからず」と脱亜論を展開したのと対照的に、宮崎滔天は中国の開明を実現して共にアジアを興そうと夢見たのです。

ここでとりあげたのは二人だけですが、ほかにもいろいろなタイプのアジア主義者がいました。脱亜論とアジア主義とを比較しますと、アジア脱却の西洋化かアジアへのこだわりかという相違だけでなく、その文明観や世界観にも大きな違いがあることがわかります。一方は一種の進歩史観で野蛮から文明へという発展を措定しており、それに乗り遅れた中国・朝鮮は弱者必敗なのだというわけです。他方のアジア主義は、そんな文明は本当の文明ではない、「弱きを助け強きをくじく」ような文明こそ必要だ、アジアにはもっと大切な人を思いやる道徳や優れた芸術があるのだから、日本はアジアとともにアジアを発展させるべきだと考えました。

今取りあげましたのは、だいたい19世紀後半から20世紀初めのころのことです。今から百年以上前です。その後20世紀前半の日本は、基本的に脱亜論的論理でいったように思われます。朝鮮を植民地にし、清朝か

ら中華民国にかわった中国に対華二十一カ条要求を認めさせ、昭和になるとご承知のように満州事変、日中全面戦争、アジア太平洋戦争と突きすすんでいきました。基本的に日本は遅れてやってきた帝国主義国としてふるまったと言ってよいでしょう。

では一方のアジア主義はその後、アジアとの協力を基調に基本的に平和的主張を展開したかという点、決してそんなことはありません。むしろ「大アジア主義」とか「大東亜共栄圏」という名のもとに積極的に侵略戦争に協力していきました。岡倉天心や宮崎滔天はアジアとの協力や連帯は主張しても、その中心が日本であるとは決して言っていませんでした。しかしその後アジア主義は、白人帝国主義をアジアから駆逐してアジア諸民族を解放する、それがわが大日本帝国の使命であるという言い方になっていきました。これをアジア・モンロー主義などと言うことができますが、アジア諸国・諸民族との協力や連帯といったものから日本によるアジア支配の論理になっていったのです。アジア主義のなかの反西洋的側面が肥大化していったとみることもできるでしょう。

もともと脱亜論にしてもアジア主義にしても西洋文明諸国によるアジア支配への脅威感や反発という点では共通したものがありません。ただアジア主義には中国や朝鮮の文化への尊重や共感が含まれていましたが、「大東亜戦争」の時期になるとそれもどこかへいってしまい、反西洋、非合理主義、精神主義というような面だけが目につくようになってしまったのです。

3. 中国の20世紀

さてそれでは中国の20世紀はどのようなものだったのでしょうか。今から百年前は中国は清朝の末期でした。清朝は確かに専制王朝でしたが、さすがに20世紀になると改革をせざるを得なくなります。百年前の1908年には欽定憲法大綱が公布されます。

立憲体制への模索は行われたのですが、清末の改革はやはり遅すぎました。日清戦争以後清朝改革派は日本の明治維新や立憲君主制をひとつのモデルとして考えていました。しかし改革派による1898年の改革（戊

戊の変法) が否定されてしまったため、多くの青年・知識人は清朝の改革よりも清朝の打倒に魅力を感じるようになっていました。

孫文らの中国同盟会が1905年に結成され、ついに1912年に中華民国が成立しました。実業家や清朝の改革派も清朝に見切りをつけたので辛亥革命は成功したのです。それから1949年の中華人民共和国の成立までが、いわゆる中華民国の時代です。中華民国のなかでも1927年にそれまでの北京の中華民国政府にかわって南京に国民党による中華民国国民政府が成立しました。これを国民革命と言っていますが、要するに20世紀の前半中国では三回も革命がおきたこととなります。

さきほど日本のアジア主義とその変質ということを申し上げましたが、中国でも清末改革派のように日本を手本にして国家の近代化をはかろうとする動きがありました。また清朝を徹底的に否定した革命派の孫文も、その活動拠点は日本でありましたし、宮崎滔天ら多くの日本人の協力援助を受けて活動していました。孫文は日露戦争での日本の勝利をアジア人として歓迎すべきものと評価しました。

しかし孫文は、その日本が1910年に韓国(朝鮮)を併合して植民地にしてしまうという段階になると、変化してきます。後に孫文は犬養毅に宛てた書簡で、「当時、中国四億の人民とアジアの各民族はみな、日本をアジアの救世主と考えていたのであります。ところが、はからずも、日本は遠大な志も高尚な考えももたず、ただヨーロッパの侵略手段の後に追随することを知るだけで、ついに朝鮮を併呑する行動をとったがために、アジア全域における人心を失うにいたったことは、まことに残念なことであります。『その心を得る者はその民を得、その民を得る者はその国を得る』(『孟子』、「離婁上」) という古人の言葉があります。もし日本がロシアに戦勝 [1904-05年の日露戦争のこと] した後に、この古人の言葉を教訓としていたならば、こんにちのアジア各国はみな日本に帰依していたであらうでしょう(1923年11月16日) と、日本は韓国併合によってアジアの人心を失ったと述べています。

孫文は1924年11月に神戸で有名な「大アジア主義」についての講演をします。そこで彼は覇道と王道ということを言いました。覇道とは武力

や圧迫によって他人を無理に従わせるもので、他方王道とは逆に仁義や道徳によって他人を感化するものだというのです。西洋のやり方は霸道であり、東洋の伝統は王道であると言いました。ずいぶん単純化した言い方ですが、孫文の言いたかったのは国際社会において軍力を強化して他国を威嚇したり侵略するやり方をとるのか、それともまず第一に信頼関係の構築をめざすのかということだと思います。前者は、西洋の帝国主義のやり方であって、宮崎滔天が「野蛮的文明」と呼んだものと同じです。

孫文は彼の「大アジア主義」の基礎は「われわれの固有の文化を基礎としなければならない」と言っています。その固有の文化とは、王道すなわち東洋の仁義・道徳ということになります。岡倉天心が「今日のアジアの課題は、アジアの様式を守り、これを回復することにある」と述べていたことと発想において通底するところがあります。

これは非常に有名な箇所ですが、孫文はその講演の最後で、「あなたがた日本民族は、欧米の覇道の文化を取り入れていると同時に、アジアの王道文化の本質ももっています、日本がこれからのち、世界の文化の前途に対して、いったい西洋の覇道の番犬となるのか、東洋の王道の干城となるのか、あなたがた日本国民がよく考え、慎重に選ぶことにかかっているのです」と結んでいます。

「西洋の覇道の番犬」として、言い換えれば遅れてやってきたアジアの帝国主義国として日本がふるまうのか、「東洋の王道の干城」としてアジアとの真の信頼関係を作っていくのか、これを孫文は日本に迫りました。このことばは、中国のアジア主義から発せられた最高の忠言だったと思います。

残念ながらその後の日本は、やはり「西洋の覇道の番犬」として中国東北地方（満州）を侵略し、さらに日中全面戦争ということになってしまいました。

ところで中華民国の時代を通じて中国では、紆余曲折はあっても次第に国民国家としての統合が進み、経済の着実な発展がみられ、国民のナショナリズムが定着していきました。日本のなかには今でも、中華人民

共和国成立以前の中国は、軍閥が割拠して国はバラバラ、経済は資本主義以前の状態、議会政治や法制度は未発達というイメージをもっている人がいますが、必ずしもそんなことはありません。特に1927年に南京国民政府が成立してからの約十年間は、国家の統一や経済の発展の面で大きな変化がみられました。

その発展に立ちふさがったのが、日本でした。今日は日中戦争（中国から言えば抗日戦争ですが）のことは詳しく申し上げませんが、少なくとも抗日戦争の八年間を戦いぬくだけの力量が中国にあったことは確かです。ソ連やアメリカの援助があったことは事実ですが、それだけで中国が日本に屈服しなかった理由を説明することはできません。

日本は、「支那は弱い」と中国を過小評価していて、すぐに戦争は終わると思っていましたが、やってみるとなかなか思うようになりません。その過程で日本軍はずいぶん乱暴なことをやりました。日中戦争で中国側にどれだけの犠牲者がでたのかははっきりしません。中国では満州事変以来3500万人の死傷者がでたと言っていますが、かりに死者が1000万としても膨大な数字です。当時の中国の人口が4億5千万として、人口の2パーセントが亡くなったことになります。平均すれば親戚のなかに一人くらいは抗日戦争の犠牲者がいることになります。もちろん日本も結果として大変な犠牲を払うことになったわけですが、中国やアジアの軍隊が日本に攻めてきたのではなく、日本軍が中国や東南アジアへ攻めていったのです。これはきわめて単純なことです。日本人のなかには中国が言うほど南京で殺してないとか、中国が大げさに言いすぎているという向きがありますが、これはあげあし取りのようなもので、ではなぜその時日本軍は中国にいたのかという根本的問題の前にはやはり説得力を失ってしまうでしょう。

ところで、日中戦争の期間中国では国家による経済統制や軍隊の中央化がすすみました。戦争が終わると、満州帝国が崩壊し、上海をはじめとする日本占領地区が還ってきました。そこでの日系企業はおおかた国民政府に国営企業として接收されました。国営企業がふえたのは中華人民共和国になって共産党が支配したからではなく、実は戦争の時代から

はじまっていたのです。共産党はこの国民政府の国営企業を、今度は社会主義だといって看板を換えたわけです。

さて1949年に中華人民共和国が建国されてからもう60年近くたちました。この約60年を見ますと、前半の30年と後半の30年とで大きく異なります。前半の30年は大部分毛沢東の時代です。1976年に毛沢東が死去してから数年間は、華国鋒の過渡的時代でした。

戦後、日本の軍事的脅威はなくなったわけですが、台湾へ去った国民政府との緊張は残りました。さらに中華人民共和国成立の翌年朝鮮戦争が勃発し、中国は人民志願軍を送り込んだのでアメリカ軍と直接対決することになりました。その後しばらく中国はアメリカ帝国主義が世界の敵であると言っていました。60年代になるとそれまで親密だったソ連との関係がおかしくなり、中ソ対立が起きました。ソ連現代修正主義とか、のちにはソ連社会帝国主義という用語が使われました。1972年ニクソン米大統領が訪中し、以後米中関係はよくなりますが、こうなるとソ連が第一の敵とされました。要するに日本のあとはアメリカ、アメリカのあとはソ連と、いつも大きな敵が中国を侵略しようとしているという認識があったわけです。そのため戦争に備えて国民の生活を統制する、消費物資や家電などはあともわし、自力更生の名で国民を動員し収奪する、内陸部に工場をつくるという構図が生まれました。おまけに60年代後半から文化大革命がおきて社会は混乱し、通常の経済活動や市民生活が維持しがたくなりました。

その間中国の人口は約二倍になりましたから、食糧増産も人口増加でくわれてしまい、国民の生活ということになると、ほとんどよくならなかったのです。敵の存在、その脅威というのは、日中戦争時期に生まれたものですが、その日本軍国主義の亡霊が70年代まで中国をさまよっていたとも言えるかと思います。

その呪縛からようやく解き放たれたのが、70年代末です。中国のまわりを見渡すと、アメリカはベトナム戦争の失敗で中国を攻撃することなど考えられない、ソ連は基本的に衰退しているし、日本が再度中国を侵略することはもっとありえない、そう考えると中国の大敵はもういない

ということに気付いたのです。さらにその30年間に敗戦国の日本は、経済的にずっと先に行ってしまいました。そこで自力更生などもうやめにして、扉を開き、経済発展を第一にするという大転換を決断しました。それを主導したのが鄧小平です。改革開放の30年間、中国の経済発展はご承知の通りです。今やアメリカ、日本、ドイツにつぐ世界第四位の経済大国になってきました。おそらくあと五年以内でドイツと日本を抜くでしょう。

この経済発展についてここではふたつのことだけ申し上げたいと思います。

第一は、日本との経済関係です。80年代日本と中国との経済格差は今よりずっと大きいものでした。日本がハイテク製品を輸出する、技術支援をする、中国からはタオルとかサンダルとかぬいぐるみの人形とかの日用雑貨品、要するにローテクのものを輸入するという貿易構造がありました。中国側もたいへん謙虚で、私たちは遅れているので日本のような先進国から積極的に学びたいという姿勢でした。その点で日本と中国は相互依存関係をもてたのです。しかし日本のメーカーは総じて中国市場に消極的で、直接投資はあまり多くありませんでした。中小メーカーの委託加工などが主流でした。

90年代になると次第に直接投資が増えてきましたが、たとえば自動車や携帯電話のような分野は、中国市場で欧米のメーカーに大きく水をあけられる状況が生まれました。中国消費者の購買力拡大を十分みていなかったのと技術流出をおそれたことなどがその理由と思われます。ホンダを別にすれば、トヨタや日産が中国に本格的に乗り出したのは、21世紀に入ってからです。

現段階と言えば、日本のハイテクと中国のローテクのような相互依存関係はもはや過去のものになりつつあります。いずれ中国メーカーの中国製自動車が日本に入ってくる日がくるかもしれません。大きく見れば日本と中国は競合時代に入りつつあります。最近みられる日本の反中国排外主義や中国製食品パッシングは、底流にこうした大状況への日本側のあせり、羨望、嫉妬、優越感などがなくないまぜになっているのではない

でしょうか。

第二に、中国社会の巨大な変化という問題です。この30年間で中国社会は大きく変化してきました。皆が平等で貧しいという社会は過ぎ去りました。都市部では中間層が急速に拡大しています。十年ほど前から持ち家制度になったことも人びとの意識を大きく変化させました。モータリゼーション、インターネットや携帯電話の急速な普及が人びとの生活スタイルを変えました。

そのなかで政府や共産党による統制は、以前よりずっと弱くなっています。かつては国民は衣食住すべて企業や学校などの単位に依存して生活していましたが、今ではそうした依存関係が多くの場合なくなるか少なくなっています。これは中国社会に流動化と自由化をもたらし、またある程度の民主化をもたらしていると思われまます。

—昨年反日デモにしても、日本のなかには中国政府がうらでやらせていると考える人がいましたが、今日でも政府や共産党がすべて国民をあやつっているなどとみなすのは非現実的です。政府や共産党への過大評価です。むしろさまざまな意見や運動が中国でも存在しており、それを表明する機会も以前よりふえつつあるというのが実態です。

日本との問題で言えば、戦争被害者の民間対日賠償請求訴訟も、中国政府としては両国の政府間関係に影響がでないようにむしろ抑えたいところを、被害者たちが押しきっておこなっている面があります。今後さまざまな市民運動も活発になってくるでしょう。

つまり改革開放政策は、経済発展だけをもたらしたのではないということです。社会構造、人びとの生活スタイル、意識、こうしたすべての面で変化が生まれてきたということです。確かに都市と農村の格差、都市のなかの収入格差は大きいものがあります。しかし現在の中国は経済発展期であるので、収入の低い人も来年はもっとよくなるという希望ももっています。そこは日本の格差拡大と大きくちがうところです。

もちろん政府や共産党の規制が、全くなくなったわけではありません。さらに中長期的将来には新しい政治体制に移行する日が来るかもしれませんが、それを具体的に論じるにはまだ早すぎるように思います。

4. 新しいアジア主義へ

日本は第二次大戦後朝鮮戦争特需のような追い風もあり経済的に急速に復興し、さらに復興だけでなく60年代の高度経済成長をへて先進国とよばれるようになりました。かつての軍事大国は、今度は経済大国として世界に登場してきました。70年代後半からは韓国、台湾、香港、シンガポールなどが経済発展をはじめ、当時NICS(新興工業国)とかNIES(新興工業経済地域)とよばれていました。これらの国や地域は、軍事政権や政権党の単一支配のもとにあり、民主的とはとてもよべない政治体制にあったのですが、とにかく政治的安定と社会秩序は確保されていたようなところですが、日本も自民党の長期一党支配が続いていましたから、その点では共通点があるかもしれません。

そして20世紀もおわりに近づき中国さらにはインドなどの経済成長が誰の目にも明らかになってきました。今日ではブラジルや復興してきたロシアとならべBRICSなどと称されています。東南アジアの経済発展も著しいものです。こうして内部にいびつなものをたくさんかえ込みながらも日本と中国だけでなくアジア全体の世界における存在感は、ずっと大きくなっています。50年代には世界経済のなかのアジアの占める比率は5パーセント程度でしたが、今では25パーセントを超えています。

冒頭で現在日中関係が必ずしも良好でないということを申しましたが、私たちはナショナリズムだけに目を奪われるべきではないと思います。今日おきている現象は他方で、日本と中国、日本とその他の国や地域といった国家、国境には必ずしも束縛されないことが多いからです。乗り物のなかで携帯のメールをしている若い人の光景は、日本でも中国でも変わりません。日本のテレビタレントやアニメ、フィギアは中国でも人気です。コンビニは中国でもずいぶん多くなりました。これらは80年代には見られなかったことです。そうしたサブカルチャーのようなものが、すぐに両国関係や政治に影響を与えるものではないでしょうが、私はそうした国境を越えたもの、もう少し広く言えばアジアのリージョナリズム(地域主義)というものが次第に形成されつつあることに注目

したいと思っているのです。

国際政治の側面でも新しい動きが見えてきています。その点で注目されるのは、日中の二国間関係というよりも、ASEAN(東南アジア諸国連合)の動向です。ASEANはもともと1967年タイ・インドネシア・シンガポール・フィリピン・マレーシアの5カ国によって結成された時には親米反共的性格をもっていました。90年代になってベトナム、ラオス、ミャンマー、カンボジアが加盟し、性格が変化してきました。さらに1997年からは日中韓の三カ国を加えてASEAN+3の協議体が生まれました。日本から当時の小泉首相が出席した2005年12月のASEAN+3首脳会議では、この枠組みが「この地域における共同体の形成に重要な役割を果たし得る」というクアラルンプール宣言が発表されました。

さらにASEANが中心となってそのほか中国・インド・日本も加盟しているTAC(東南アジア友好協力条約)、ASEAN+3にアメリカ・ロシア・EUも加わったARF(アセアン地域フォーラム)などの開かれた枠組みが生まれています。

また2001年に中国、ロシア、中央アジアのカザフスタン・キルギスタン・タジキスタン・ウズベキスタンによって結成された上海協力機構、2003年から断続的にもたれている北朝鮮をめぐる六者協議などアジアではこの十年ほどの間に重層的な新しい枠組み、試みが積み重ねられてきました。東アジア共同体の議論がようやく現実味を帯びてきているのです。

20世紀に大日本帝国が提唱した大東亜共栄圏は、白人帝国主義からアジアを解放してアジアの共栄圏をつくるという名目でしたが、結局は日本によるアジア支配の別名にほかなりませんでした。しかし21世紀に生まれつつある東アジア共同体は、欧米を駆逐するのではなく世界に開かれた共同体となるべきであるし、そうなるでしょう。またその主導権はある一国が握るものでもありません。むしろ特定の価値観を排除する寛容なものとなるでしょう。

かつてのアジア主義は、欧米の脅威やアジアの抑圧された状態をどうしたら打開できるかということで、日本・中国・アジアの協力を構想したわけです。そこでは被圧迫者としての共通意識がバネになっていまし

た。しかし20世紀を通じて、かつてのそうした欧米とアジアの関係は基本的に克服されました。この過程でナショナリズムは決定的に大きな役割をはたしたのです。中国、韓国では特にそうです。今では植民地というものは、どこにもなくなりました。1997年にイギリスから香港が、1999年にマカオがポルトガルからそれぞれ中国に返還されました。もう植民地という概念も歴史になろうとしています。私は百年くらいの単位で考えれば、やはり歴史は進歩していると感じます。

自信を失いかけていたアジアに、アジアの自信を取りもどそうとしたのがかつてのアジア主義でした。現在アジアは全体的にみれば発展しつつあり、元気があります。自信や元気は取りもどさなくても、もうあるのです。中国は百年かけてようやくその段階になってきたのです。韓国や東南アジア、インドもそうです。日本はちょっと失いつつあるかもしれませんが、ですから新しいアジア主義というのは、かつてのアジア主義と歴史的段階が決定的にちがうことがわかります。しかしアジアの伝統や文化に誇りを持ち、大切にし、そのうえで互いに協力していくべきだとする理念はやはり受け継がれるべきではないでしょうか。

日本と中国もこうしたアジアのなかで、互いにその異質性も認め合ったうえで協力していくことが重要だと思います。ナショナリズムは両刃の刃で、圧迫を受けている時は団結に役立ちますが、ここにいつまでもこだわると相互理解や共感の障害物になってしまうものです。

5. おわりに

数年前日本でも「女子十二楽坊」がたいへん流行しました。彼女たちの音楽は中国の伝統楽器や技法を使いながら、伝統音楽そのものでなく、テンポの速い西洋音楽風に仕上げられていました。演奏楽曲もポップスやクラシックをとりあげ、視覚的にも楽しめるものとなっていました。それが中国だけでなく、日本や韓国、アメリカでも受け入れられた理由であったように思います。つまり「われわれの固有の文化」(孫文)に基づきながら、新しい時代にあわせて変化、発展させていく、そうすればそれが大きな魅力となることを示していると言ってもよいでしょう。

孫文の言った「文化」とは、音楽や美術だけのことではなくて、社会の規範意識や生活習慣から国家のありかたまでを含んだ広い意味でした。

さきほどとりあげました宮崎滔天は、任侠や義を大切にする立場から、「弱者に強く強者に弱き態度」を猛烈に批判しました。孫文は、東洋の王道とは仁義・道徳であると言いました。仁義・道徳や任侠などと言うと、誰でもいかにも古くさいと感じるでしょうが、仁義とは相手を思いやり裏切らないことです。ですから現代的に言えば、信頼関係の構築と言い換えてもよいでしょう。また任侠とは、社会的正義感であり公共性であります。そう考えれば、かつてのアジア主義者の言っていたことは決して古くはないのです。そこに市民主義的という形容詞を付け加えれば、もっと現代的になります。

また最近はかなりなくなってきましたが、日本でも中国でも韓国でもその他のアジアでも、元来家族を大切に、教育に熱心です。これは儒教の伝統と思います。

20世紀を通じてアジアは「亡国」の瀬戸際から興隆の時代に変まりました。岡倉天心が百年前にアジアの「眠れる巨象」が目ざめれば、大地がうち揺らぐと言いましたが、中国の巨象もインドの巨象ももう目ざめて歩き始めています。ここに岡倉天心の時代と21世紀の現在との決定的ちがひがあります。ようやく「野蛮的文明」を克服して「文明的文明」を築くべき時代に入ろうとしつつあるのです。私はそれを「アジア主義の再生」と言っているわけです。

日中関係は日本の侵略という過去の歴史を直視しつつも東アジア共同体といったようなもう少し広い視野で、そして未来志向で議論する必要があります。同時に両国は、「仁義・道徳」や「王道」というような伝統的な価値観を忘れずに、相手を思いやりお互いの違いは認めあうという寛容な関係を築いていくべきだと思います。

ご静聴どうもありがとうございました。

追記 本稿は講演会当日の講演テープをもとに、時間の関係で当日話せなかった部分や当日会場で出された質問への回答などを補足し整理したものである。